Doshisha Journal of Health & Sports Science, 5, 28-38（2013）

原　著

人材育成とスポーツ教育プログラムの構築
―国際交流スポーツイベントを事例に―

向山　昌利[1]，来田　宣幸[2]，横山　勝彦[3]

Construct human resource development and sport education program: Case study of International sports event

Mukoyama Masatoshi[1], Kida Noriyuki[2], Yokoyama Katsuhiko[3]

Human resource development is desired because of complicated societies occur in the context of globalization. “Life skill education” is practiced to development athletes in Sport. There are some problems are like “doctrine that victory is everything”, “corporal punishment” and “injury” in extracurricular sports club activities. The system of Human resource development through daily extracurricular sports club activities is necessity for those problem solving. This purpose of this study was to make a proposal the system of Human resource development through daily extracurricular sports club activities focus international sport event.

【Keywords】sport, human resource development, life skill, international sports event

昨今においては，グローバリゼーションを背景とした社会の変化や複雑化を背景に社会を生き抜くための能力の開発，いわゆる人材育成が必要とされている．スポーツ界においては，スポーツ選手の人材育成としてライフスキルを身につけるための教育が実践されている．日本における運動部活動は，スポーツを通じた人材育成の主要な場であると考えられるにもかかわらず，勝利至上主義，体罰，怪我，教師の負担などが問題としてあげられている．そのため運動部活動には，日常的な活動を通して人材育成の機能を発揮するための仕組みの構築が必要とされている．本研究では，日常的な運動部活動を通して人材育成を実現するための仕組みと，その運営方法を提示することを目的とする．そのために，本研究では，日常的な取り組みによって人材育成機能を効果的に発揮したと考えられる国際交流スポーツイベントを事例として取り上げ，日常的なスポーツ活動が人材育成機能を発揮することを明らかにする．次に，この知見を基に，日常的な運動部活動を通して人材育成機能を発揮できるプログラムと，このプログラムを継続的かつスムーズに運営していくための仕組みを提示する．

【キーワード】スポーツ，人材育成，ライフスキル，国際交流

Ⅰ．問題の所在と研究の目的

1．背景

近年における，グローバリゼーションと自由主義経済を背景とした「個人化」の傾向は，コミュニティの崩壊や対人関係のスキル衰退に如実に表れている（横山・辻，2009a）．そこから，このような社会を生き抜くための能力を開発する，いわゆる人材育成が希求されている．日本における人材育成施策は，いくつかの省庁によって進められている．例えば，文部科学省は，「変化の激しいこれからの社会を生きる能力」を「生きる力」と定義し，それを育む施策を展開している[注1)]．そのほかにも，経済産業省における「社会人基礎力」や内閣府における「人間力」の提唱，あるいは厚生労働省での実践など様々な取り組みが行われている．

また，日本だけでなく，国際連合の専門機関である世界保健機関（WHO）は，「日常生活で生じる様々な問題や要求に対して建設的かつ効果的に対処するために必要となる社会心理的能力」（WHO，1997）をラ

注1)「生きる力」という言葉が初めて明示されたのは，1996 年中央教育審議会「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」である．

1　同志社大学大学院　総合政策科学研究科（Graduate School of Policy and Management，Doshisha University）
2　京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科（Graduate School of Science and Technology，Kyoto Institute of Technology）
3　同志社大学スポーツ健康科学部（Faculty of Health and Sports Science，Doshisha University）

イフスキル[注2)]と定義し，その開発に取り組んでいる．そして，このライフスキルを身につけるための教育は，スポーツ選手の人材育成としても活用されている．例えば，アメリカの大学スポーツ選手におけるライフスキル教育プログラムの基盤を作ったとされるオズボーンズは，知・徳・体の3つの領域に目を向けた教育がスポーツ選手にとって重要であると考え[注3)]，ライフスキルには，スポーツでの達成，学業での達成，人間的な成長という3つの側面があると指摘した[注4)]．一方，日本においては，2011年に施行されたスポーツ基本法に，「スポーツは，次代を担う青少年の体力を向上させるとともに，他者を尊重し，これと協同する精神，公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を培い，実践的な思考力や判断力を育む等人格の形成に大きな影響を及ぼすものである」と記され，スポーツのもつ人材育成機能が認められているのである．

2．問題の所在－学校現場における運動部活動

日本のスポーツ界の現状に関して，横山ほか（2009）は，次の3つの課題をあげている．1つ目は，運動部それぞれが中央競技団体の傘下にあり個別の活動をおこなっている点である．2つ目は，日本におけるアマチュアリズムが狭義の純粋性としてとらえられ，行きすぎた勝利至上主義，体罰などの問題を，アマチュアリズムとして神聖化してしまう点である．3つ目は，学校間の学生獲得競争を背景に，スポーツ選手を広告塔として利用する結果，スポーツ選手が競技へ過度な集中を余儀なくされ，スポーツと学業との両立が困難である点である．さらに，中澤（2011）は，運動部活動の問題として，運動部活動の過熱化，勝利至上主義，しごき・体罰，怪我・障害，他の教育活動へ圧迫，教師の負担などをあげている．日本のスポーツクラブのほとんどが学校教育に属している（Miller，2011）ことから，日本における運動部活動は，スポーツを通じた人材育成の主要な場であると考えられる．高等学校学習指導要領によると運動部活動の意義は，「スポーツに親しませ，学習意欲の向上や責任感，連帯感の汎用等に資する」（文部科学省，2008）と記されている．つまり，運動部活動は，人材育成の機能をもつととらえられているのであるにもかかわらず多くの問題を有しているのである．

中村（2009）は，このような運動部活動問題の根幹について，運動部活動が「スポーツ界の基盤としての役割」をもつものに育て上げられたことと，その「行き過ぎ」にあると指摘している．したがって，運動部活動の課題は，運動部活動がスポーツを「行き過ぎ」ることなく活用できるかどうかという運動部活動の運営にかかわるものといえる．中澤（2011）は，運営面の課題として運動部活動が学習指導要領で定めた教育課程に含まれない課外活動であるため，制度的な基盤が脆弱であることを指摘する．例えば，運営方法が教員養成課程に含まれていないため，顧問教員は手探りで部活動の運営にあたらなくてはならない．また，顧問教師は，勝利以外の基準で評価されることが少ないため，スポーツのもつ性質のままに「行き過ぎ」てしまうとも考えられるのである．

さらには，横山ほか（2009）が指摘する運動部活動の閉鎖性は，結束型ソーシャルキャピタル[注5)]の特徴をもつと考えられる．その特徴とは，組織の内部における人と人との同質的な結びつきであり，組織の内部で信頼・協力・結束を生むものである（Putnam，1993）．一方で，このような特徴が強力になりすぎると，差異を認めず，同質化を求める圧力ともなり，運動部自らがスポーツの「行き過ぎ」を助長してしまう可能性をももつのである．以上のように，運動部活動には改善すべき問題が多い．特に，運動部活動には，スポーツのもつ人材育成機能を日常的に発揮できるような仕組みの構築が必要とされるのである．

3．研究の目的

日本の運動部活動においては，ライフスキル教育として人材育成を目指した取り組みを実施している事例がいくつかみられる．これらの取り組みの共通点としては，グラウンドや体育館での練習や試合といった日常的な運動部活動に追加する機会として，ライフスキル教育のプログラムが実施されている点があげられる．例えば，松野ほか（2010）は，大学硬式野球チームに対するライフスキル教育理論に基づくチームビルディングプログラムの取り組みの結果として，部員のライフスキルが向上する可能性を示唆している．また，国際的なトップアス

注2) 具体的なテーマとして次の10点が掲げられている．①自己認識，②共感性，③効果的コミュニケーション，④対人関係スキル，⑤意思決定スキル，⑥問題解決スキル，⑦創造的思考，⑧批判的思考，⑨感情対処，⑩ストレス対処．

注3) もともとスポーツは，イギリスのパブリックスクールにおいて人間陶冶の手段として採用され発展した．この経緯からも分かるように，スポーツは，ライフスキルの獲得をはじめ，人材育成機能をもつと広く認識されている（松野ほか，2010；上野，2006）のである．

注4) このような，アメリカの大学スポーツ界におけるライフスキル教育が生まれた背景は，選手のモラルや学力の低下による国際競争力の低下に歯止めをかける必要性がでてきたからである（松野，2009）．

注5) ソーシャルキャピタルとは，人間がつくる社会的組織の中に存在する信頼，規範，ネットワークというソフトな関係を意味している．ソーシャルキャピタルには，「結束型」と「橋渡し型」がある．「橋渡し型」の特徴は，異なる組織間における異質な人や組織を結びつける点である．

リートのセカンドキャリア問題への対応策として，彼らを対象とした人材育成プログラムもライフスキル教育のひとつと考えることができるであろう．

このようなライフスキル教育の特徴としては，日常的な活動とは別に追加的な教育プログラムとして実施されている点があげられるものの，上述したようにスポーツには，人材育成機能があると考えられていることから，ライフスキル教育を追加的なプログラムとして実施しなくとも，日常的な運動部活動を通して人材育成を可能とすることができると考えられる．そして，この方が，追加的なプログラムを選手が受けるよりも，効果的な人材育成が可能になると考えられる．

そこで，本研究では，日常的な運動部活動を通して人材育成を実現するための仕組みについて，その運営方法を提示することを目的とする．そのために，本研究では，日常的な取り組みによって人材育成機能を効果的に発揮したと考えられる国際交流スポーツイベントを事例として取り上げ，国際交流スポーツイベントの関係者に対するインタビュー調査を行い，日常的なスポーツ活動が人材育成機能を発揮するための知見を明らかにする．そして，この知見を基に，日常的な運動部活動を通して人材育成機能を発揮できるプログラムを提示する．あわせて，このプログラムを継続的かつスムーズに運営していくための仕組みも提示する．

Ⅱ．日台キッズラグビー交流

1．概要

1）目的及び実施体制

日台キッズラグビー交流（以下，「ラグビー交流」）の主催者は，台湾台北市を本拠地とするアマチュアラグビーチームのファイブウッズ[注6]であり，このチームは，台湾に在住または交流のある日本人と日本と交流のある台湾人を中心に編成されたチームである．ラグビー交流の目的は，2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災で被災した子ども達に楽しい時間を経験させ，元気づけようとする目的で，被災児童支援・国際交流プロジェクトとして実施された．この企画及び運営は，スポーツを通じた社会問題の解決を活動の目的とする任意団体であるスポーツバンク[注7]とスポーツマーケティング企業である株式会社 GB プロモーション[注8]が担当し，渡航費や宿泊費といった費用に関しては，台湾の公益財団，日本や台湾の企業，日本ラグビーフットボール協会などからの寄付によって実施された[注9]．

ラグビー交流の日程は，2012 年 3 月 23 日から 25 日までの 3 日間であった．参加チームは，岩手県釜石市において活動する釜石シーウェイブス RFC ジュニア[注10]（以下，「釜石ジュニア」）であり，釜石ジュニアに所属する選手（小学校 1 年生から 6 年生）15 名，コーチ 6 名，および保護者 6 名が参加した．

2）内容

ラグビー交流は，表 1 に示したように合同練習や親善試合などのラグビー関連プログラムを中心として，市内観光や支援者によるレセプションなども開催され

注6）FIVEWOODS ホームページ <http://www.facebook.com/TWJRFC.FIVEWOODS>（2013 年 1 月 31 日アクセス）

注7）スポーツバンクホームページ <http://www.facebook.com/sportsbank>（2013 年 1 月 31 日アクセス）

注8）株式会社 GB プロモーションホームページ <http://www.gbp2005.jp/>（2013 年 1 月 31 日アクセス）

注9）そのほかにも，ラグビー交流は，日本と台湾の企業，両国の公的機関，有志からの有形無形の協力によって実施された．

注10）釜石シーウェイブス RFC ジュニアは，ラグビーを通した「ジュニア世代の運動能力向上・青少年の健全育成」を目的として活動を実施している小学生を対象のラグビースクールである．釜石石シーウェイブス RFC ジュニアホームページより．<http://sports.geocities.jp/kamaishi_seawaves_junior/page002_outline.html>（2013 年 1 月 31 日アクセス）

表1　ラグビー交流スケジュール

3 月 23 日	前日 22：00　釜石市出発 10：00　成田空港　BR195 便にて台湾へ 13：00　台北桃園空港着，公的機関を表敬訪問，台北市観光 18：30　晩餐会
3 月 24 日	9：00　ラグビー合同練習 13：00　ラグビー親善試合 15：00　温泉体験 18：00　晩餐会
3 月 25 日	9：00　台北市観光 15：00　台北桃園空港　BR196 便にて帰国 19：00　成田空港着，釜石市へ出発 翌日　5：00　釜石市着

た．釜石ジュニアは，3 月 22 日夜に釜石市から成田空港へ移動し，3 月 23 日早朝に成田空港から台湾へ出発した．台湾到着後，釜石ジュニアのメンバーは，外交部[注11]の表敬訪問や台北市内の観光を行い，夕刻よりラグビー交流を支援した企業や公的機関，ファイブウッズの関係者による歓迎レセプションに参加した．レセプションでは，台湾の支援者からの歓迎のあいさつや台湾と日本の歴史や今後の関係に期待する旨のスピーチがあり，釜石ジュニアからは，招待に対するお礼と歌の発表がなされた．

2 日目の午前中には，台湾のラグビーチームである信義南門橄欖球隊（現地中学校ラグビー部）との合同練習が実施され，午後には両チームによる親善試合が行われた．試合結果は，15-25 であり，釜石ジュニアは健闘したものの勝利することはできなかった．試合終了後，スピーチや写真撮影などが行われ，互いの健闘をたたえ，その後，釜石ジュニアは，台湾ラグビーフットボール協会主催レセプションに出席した．

3 日目は，歴史的建造物や台湾料理店などの観光を行った後に日本に向けて出発した．成田空港を経由して，釜石市に到着したのは翌朝であった．

2. インタビュー調査

1）目的及び方法

調査の目的は，国際交流スポーツイベントを経験することによって選手やコーチ，保護者に生じた変化について定性的に明らかにし，人材育成を効果的に促進する仕組みに関する知見を得ることである．

調査対象者は，選手 7 名（交流時：小学校 1 年生から 5 年生），コーチ 6 名，保護者 3 名であった．選手 7 名は全員ラグビー交流に参加した．調査の実施時期は, 2012 年 9 月 30 日であった．調査の実施方法は，対象者のラグビー交流を通じて得た印象をラグビー交流の時系列に沿って尋ねる，半構造化面接法を採用した．コーチを対象とした調査は，岩手県釜石市にある A ホテルで実施し，選手及び保護者を対象とした調査は，釜石ジュニアの練習場であった B 高等学校グラウンドとした．コーチを対象とした調査は，集団面接法にて実施し，選手及び保護者を対象とした調査は，個別面接法で実施した．

3. 結果及び考察

1）ラグビー交流の開催が決まるまで

コーチや保護者の話によると，釜石ジュニアは，勝つために厳しく練習を行う雰囲気ではなく，ラグビーをする楽しさに重点が置かれ，「楽しく」「仲良く」練習する雰囲気をもつチームであった．また，例年は，年末のラグビーシーズンの終了とともにチームとしての練習も終了していた．

震災が発生した以降は，グランドに仮設住宅が建設されたうえに，利用が可能である他のグラウンドも他競技との共同利用となるなど，利用回数や利用時間が制限され，ラグビーをする環境が整っていなかった．保護者からは，「子ども達は，（ストレスなどを）発散する場がなく気の毒」「息子は震災を思いだすとつらいようだった」という回答があり，選手は心身ともに被災の影響を大きく受けていたといえる．

2）ラグビー交流の開催が決まってから交流当日まで

台湾遠征を初めて聞いた時の印象として，選手は，「楽しみに思った」「ちょっと緊張したが, 嬉しかった」など前向きの感想が多く聞かれたが，「言葉が通じるか不安だった」「試合で活躍できるか心配だった」など不安感を口にする選手もみられた．また，遠征前に書籍やインターネットを通じて台湾について調べた選手もいたものの，「ジャングルに埋もれている」「建物が少ししかない」といった誤った印象をもつ選手もいた．保護者についても，台湾の歴史や場所を詳しく知らなかったと述べた者もあり，元々台湾に対して高い関心をもっていた訳ではなかったといえる．

コーチや保護者によると，ラグビー交流の開催決定後，「台湾に失礼のないように」との思いから，しっかりとした準備が必要であると認識し，従来は 12 月末で練習を終了していたが，その年については練習を継続して実施することとなった．また，コーチは，練習でのランニングやタックルの量を増やし，コーチングの態度も厳しくした．このように選手にとっては，身体的にも精神的にも厳しい練習であったといえる．

コーチや保護者の話では，選手の様子として「やればやるほど上手くなることが嬉しいようだった」「練習はきついけど楽しいといっていた」「初めて自分の限界を越えることを楽しんでいたようだ」などの話が聞かれた．また，選手本人からも「ラグビーへの取り組みが変わった」「ラグビーに対して積極的になった」との話が聞かれた．厳しい練習を行うことで，選手は自分自身の限界に挑戦し，それを乗り越えることの喜びを知ったといえる．このように，厳しい練習を乗り越えることができた点について，選手は「台湾に行きたかったから頑張った」「頑張って海外に行きたいと思った」などと話し，コーチは，「（台湾行きという）目標があれば頑張れる」と回答した．以上のように，ここでは，目標の設定と共有が重要であることが示唆された．

さらには，全体練習だけでなく腕立て伏せと腹筋を

注11) 日本の外務省に該当する．

毎日 40 回ずつ自らに課すほどの高い意識で日常生活を送っていた選手もみられた．また，保護者の話からは，ラグビー以外にも「時間に対するルーズさが消えた」「自分のものを自分で用意するようになった」という変化が報告された．このように，台湾遠征に向けた厳しい練習を通して，コーチや保護者は，ラグビーだけでなく日常生活における選手の成長を実感していたといえる．

3）ラグビー交流の当日

選手からは, 台湾との合同練習や親善試合を通して,「トライできてよかった」「タックルできた」「タックルにいけなくて残念」といった具体的なプレーに対する感想が多く，コーチからは,「やろうとしたプレーができた」「試合が一番印象深い」という感想がみられた．また,「ラグビーのゲームは楽しい」「台湾の人たちと一緒に練習ができて楽しかった」といったプレーそのものや台湾選手との交流の楽しさを語る選手もみられた．

コーチからは,「試合が終わったらかなり感動した．自分がよっぽど力を入れていたと思った」という回答も得られた．この背景には，台湾での親善試合で良い結果を残すことを目標として，コーチが十分な練習を行ったことによる，達成感の獲得があると思われる．このように，ラグビー交流は，選手だけでなくコーチ陣にとっても，渡航前の練習に対する高い意識につながっていたといえる．

また，保護者からは,「試合後，コーチの感動の涙をみて，コーチを身近に感じた」,「チームとしてまとまった」という感想が述べられた．これは，ラグビー交流が，選手やコーチの個人的な成長だけでなく，チームという集団に対するプラスの効果を示唆するものである．つまり，ラグビー交流に向けて選手とコーチが懸命に努力し，親善試合で成果を示し，その成果に満足できたという一連の経過がチーム内の結束力を高めたといえ，ラグビー交流が，ソーシャルキャピタルを醸成する一つの手段となったことを示唆する．

選手の中には「台湾に到着した際に息がしづらかった」と，かなり緊張していたことをうかがわせる回答をした者もあった．また,「言葉が不安」「言葉は分からなかった」「言葉が大変だった」と台湾の人々とのコミュニケーションに対する不安を感じている様子であった．しかし,「台湾の人が一生懸命プレーしていて友達だと思った」「一緒に練習していて絆を深められたことがうれしい」「台湾の人の気持ちが分かるような気がした」という反応もあり，ラグビー交流が貴重な非言語的コミュニケーションの体験になったといえる．

ラグビー以外の側面に関しても，選手からは，台湾の超高層ビルである台北 101 の高さや小籠包の美味しさに感動したとする感想が多くみられた．選手は，ラグビー交流を通して「行く前の想像と違う」本当の台湾の文化を体験したといえる．このことは，今日のような情報化社会においても，実際に体験をすることで，異国に関する理解というような新しい気づきを得られる可能性があることを示している．

選手は,「台湾の人たちを怖いとは思わなかった」「台湾は優しい人がいっぱいの良い国だと思った」といった回答から，台湾に対して好印象を抱いているといえる．また,「歓迎の気持ちが嬉しかった」と台湾の人々の歓迎の態度を喜ぶ回答も多く得られた．保護者からも,「いいところだと思った」「親日的で楽しかった」「また連れて行きたい」という感想が多く，ラグビー交流が台湾に対する前向きな興味関心を引きだしたといえる．

4）ラグビー交流の終了後

選手からは,「ラグビーを頑張れている」「タックルしようという気持ちがでてきた」といった回答があり，コーチからもラグビー交流によって「勝負に対する意識が強くなった」,「勝ちたいという気持ちに気がついてくれた」といった回答が得られた．これらのことから，渡航準備期間を含めたラグビー交流の経験が，選手に対して勝負にこだわる意識を植えつけ，子ども達のラグビーに対するやる気を引きだすひとつのきっかけになったといえる．

コーチからは,「コーチとして良い経験をさせてもらった」「子ども達のラグビーへの興味をもっと伸ばしてあげたい」「ラグビーを通じて色々な人がつながっていることを子どもたちに伝えていかないといけないと思った」という声が聞かれた．さらに，ラグビー交流で満足できる結果を得るという目標に対して，選手とコーチが一丸となった取り組みが「チームとしてまとまる良い機会」となり,「コーチと子どもの位置が近づける機会」になったという感想も得られた．このことは，コーチに対して自らの役割の一つが選手達の人間的成長に対する支援にあることの再認識を促したといえる．さらには，選手とコーチの共通目標を達成するための取り組みがチーム内のソーシャルキャピタルを醸成したと考えられるのである．

選手からは,「頑張るという気持ちになった」「もっとやれると思った」といったラグビーに限定されない日常生活全般に対する前向きな発言が多く聞かれた．さらに, ある選手は「勇気と自信がついた」とこたえ，帰国後，自ら学級委員長に立候補するなど実際の行動に反映されていた．また,「震災で亡くなった人のこ

とを考えると元気がでないけど，台湾に招待されたあとからはずっと元気がでる」など心理面においても前向きな影響がうかがわれた．このように，ラグビー交流は，ラグビーに限定されない生活全般に対する自信と意欲を選手達から引きだすことができたといえる．

コーチからも，ラグビー交流を通して選手が「自信をもつ」「勇気をもつ」「自立する」ひとつのきっかけとなったとの回答が多くみられた．さらに，コーチは，このような成長を遂げた子ども達に対して「10 年後の街を引っ張る人材」になることを期待し，さらなる成長を求めていた．このことは，コーチがラグビー交流を選手達のラグビーにとどまらない人間的成長の機会であるととらえていると指摘できる．

多くの選手の「楽しかったからもう一回台湾に行きたい」という回答は，ラグビー交流が選手の台湾と台湾の人々に対する前向きの印象を引きだしたことを推察させる．さらに「外国に行ってみたい」「ほかの国にも行ってみたい」と台湾だけでなく海外への興味を引き起こされた選手もいた．選手たちは，ラグビー交流を通して台湾だけでなく他国に対する興味や関心を持ったといえる．保護者の帰国後の変化に関する回答からも，「台湾という単語がでてくるとすぐに反応する」といった，台湾に対する前向きの印象を持った子どもたちの姿を連想させる．

5）まとめ

ラグビー交流を通じて，選手は意欲的に練習に取り組み，その効果がスポーツ場面だけではなく，日常生活面にまで波及したことがうかがえ，ラグビー交流はまさにライフスキル教育の実践ということができるのである．インタビュー調査の結果を整理すると，ラグビー交流の効果としては，次の 5 点があげられる．1 点目は，選手が厳しい練習にも意欲的に参加するようになった点である．2 点目は，選手たちが生活全般に対する自信と意欲を獲得し，また，保護者がラグビー交流を通じた選手達の成長を実感していることである．3 点目は，チーム内のソーシャルキャピタルを醸成したことである．4 点目は，国際交流に対してポジティブな印象と，台湾をはじめとする異国への関心を選手や家族に与えたことである．5 点目は，コーチがラグビー交流を未来の釜石を担う人材の育成と釜石の復興に結びつける中期的な構想をもつようになったことである．これらの変化は，コーチや保護者からの観察によって明らかにされただけでなく，選手本人からのインタビュー調査からもその変化を実感している様子がうかがえた．このことから日常的な取り組みであったとしても，仕組みと工夫があれば，ライフスキル教育として効果的に機能する取り組みにすることができるといえ，このことは運動部活動を運営する際のヒントとなるであろう．

インタビューの結果からは，この成果をだした主な要因として次の 3 つをあげることができる．まず，1 つ目は，選手達が先述の共通目標を達成できるように，コーチや保護者からの支援があったことである．日常的なスポーツ活動によってライフスキル教育を実践するためには，選手やチームに対する支援体制の構築が重要といえる．2 つ目は，親善試合において満足できる結果を得るといった目標を選手とコーチ間で共有していたことである．達成すべき目標が明確であったために，海外遠征，厳しい練習への取り組みといった，選手やコーチが挑戦する場の設定がなされたのである．3 つ目には，レセプションや観光などラグビーだけに限定されないプログラムを通して，台湾文化を経験する機会があったことである．スポーツだけの経験ではなく，広く社会経験を行うことが選手のライフスキルを高めるためには重要といえる．

以上，ラグビー交流には，選手だけでなくコーチや保護者らが一体となったチーム支援体制が構築されていた点，適切な目標が設定され，目標に向かって挑戦する場が設定された点，そして，社会的な活動を経験する機会があった点の 3 つの要因によって，チームという集団に対して，及びチームを構成する選手，コーチ，保護者に対してもポジティブな影響を与えたということが明らかとなった．

Ⅲ．運動部活動に対するプログラムの提案

1．概要

ここでは，ラグビー交流から得られた知見を基に，日常的な運動部活動を通して人材育成を発揮できるプログラムを提示する．その知見は，プログラムの人材育成機能の発揮を実現した要因として，①支援体制の構築，②目標の設定及び共有，③社会経験，の 3 点から整理されたものである．

本論では，ライフスキルプログラムの対象を，勝利至上主義の弊害が散見される高等学校の運動部に所属する生徒とする．そこで，アメリカの大学スポーツ選手のライフスキルプログラムの基盤となったオズボーンズによるライフスキル教育を参考にして，①スポーツでの達成，②学業での達成，③人間的な成長の 3 つの側面を実現するための方策を検討することとする．また，人材育成プログラムを理論的かつ実践的に進めていくための評価を実施することが求められている（真山・新川，2009）ことから，上述した 3 つの要因と 3 つの側面に加え評価も関連づけて提案する．

2. プログラム内容

1）支援体制の構築

人材育成機能を果たすための仕組みとしては，プロジェクトチーム（以下，PT）を設立し，支援体制の基盤とする．PT は, スポーツでの達成, 学業での達成, 人間的成長を総合的に支援し，人材育成プログラムを継続的かつスムーズに運営していくための仕組みの根幹となる．ここには，教員，コーチ，保護者，地域関係者，選手の代表者，そして学識経験者の参加を想定する[注12)]．地域関係者と学識経験者は, 結束型ソーシャルキャピタルを形成しやすいとされる運動部活動を開かれた組織にする機能ももつといえる．また，PT のマネジメントを担当する者には，科学的知見や社会的な調整力など高い能力が要求されると共に，様々な方策を実行するための権限と責任の委譲も求められる．

育成された人材の輩出，学校と家庭の連携，地域の教育力の改善という価値創造と，それにかかわる新たな知識の創造（松行ほか，2002）を実現するために，ここでは，次の 6 点に留意したパートナーシップによる PT 運営が望まれる．①関係者間における対等性の尊重，②自立性の尊重，③信頼関係の継続，④相互性の創出, ⑤自由で「ゆるやかな連結」, ⑥補完性である．このように多様な関係者がそれぞれの利害を越えて連携し，運動部活動の運営に関する理想を合意形成する必要がある．

教育においては，学校と家庭の連携が重要であると指摘されているにもかかわらず，教師と保護者が共通認識をもつことが難しい現状が指摘されている（榊原，2009）．PT は，この点を打破する契機として，これまでの PTA 活動に代わる新しい取り組みとしての機能が期待される．保護者や地域関係者に対して，チームや選手を支援する役割を与えることで主体者意識を醸成し，共同体としてのゆるやかな連結を目指す．

2）目標の設定

スポーツを通した人材育成を実現させる仕組みとして,「目標の設定」に着目し，目標に基づいた支援を実施する．まずは，PT が中心となり学校の理念・行動規範・規則に沿った運動部活動における理念・行動規範・規則の作成を行う．また，学校のアドミッションポリシー，カリキュラムポリシー，ディプロマポリシーに沿って，運動部活動がどのような選手を受け入れるか，どのように人材育成を実施するか，どのような人材として社会に送りだしていくのかという点を明確にする．これらの目標を事前に設定し，広く周知することが重要である．また，具体的なチームのルールを設定する際には，PT だけでなく選手に対して主体者意識やチーム帰属意識を高めるために，議論への参画を促す．

スポーツでの達成を実現するためには，科学的に計画された練習に取り組むことが必要である．したがって，まずは，チームの指導者が立案計画した練習計画を PT によって絶えず評価・管理できる仕組みを導入する．さらには，学校やチームの指針に則った競技面での選手の個人的目標を設定させ，その達成を支援する．この段階では，選手の取り組みに関する進捗状況を PT が確認し，適宜指導することとなる．客観的な評価を可能とするためには，目標を単なるスローガンとして掲げるだけでなく，具体的に数値化することのできる目標を設定させる．

学業での達成についても，スポーツでの達成と同様に個人の目標設定と目標に基づいた支援を中心に実施する．横山・辻（2009b）は，選手の人生がスポーツにかたよっている危険性と，基礎学力と教養といった認知レベルを上げる必要性を指摘している. そこでは, 理由として，競技引退後に認知レベルを上げようと試みる場合，納得のいくセカンドキャリアを築くことが困難である点と, その取り組みが遅れれば遅れるほど, より多くのお金と時間が必要となる点があげられている．したがって, 生徒個別にポートフォリオを作成し, セカンドキャリアの観点からも学習支援を行う．

人間的な成長を実現するためには，選手それぞれの自己理解と目標設定，意思決定を通して主体的な行動を促す．具体的には，選手がこれまでの人生を振り返りながら自らの強みと弱みを認識し，これからどのような人生を送るのかといった視点から人生の目標と計画を設定させる．このような経験を通して，自分自身の人生に対して受け身にならず，自ら考え意思決定を行う力を養う．この結果，自己有能感が高まり，人間的な成長へとつながるのである．

3）社会経験

スポーツでの達成を実現するために，まずは，海外遠征などを通して，国際交流の機会を作り，異文化を体験することを実施する．世界のトップ選手のプレーに直接触れることは目標設定の観点からも有効といえる．また，海外のスポーツチームを日本で受け入れることや，彼らに日本文化を分かりやすく伝えるといった体験なども考えられる．そのほか，地域スポーツで

注12) 教員とは，顧問教員に限らず生徒指導担当教員などを指す．コーチは，競技指導を実施する者であり，顧問教員とアクターが重なる場合もあると考えられる．保護者とは，選手の保護者である．地域関係者とは，地域に住む人々である．選手とは，運動部活動に所属する選手の代表者およびマネジャーを指す．学識経験者とは，ライフスキル教育に関する学術的知見をもつ大学などの教員を指し，理論に沿った人材育成の実現を支援する者である．

のボランティア活動への参加，運動部活動主催のイベントを企画運営するといった活動は，選手の新たな態度や行動を必要とし，自らの属性と異なる多くの人々と触れ合い，自分自身とスポーツを客観的にとらえる経験となるであろう．

人間的な成長とは，これまでの選手の態度や行動の枠から，一歩を踏みだし新たな態度や行動を習得することでもある．例えば，スポーツをコーチから学ぶだけでなく，自らがコーチとなり仲間や後輩を指導することも考えられる．このことは，それまでの経験によって身体に染みついた暗黙知[注13]を表出化することにもつながり，新たな知の創造サイクル[注14]を創りだすきっかけともなる．つまり，コーチの経験は，競技レベルを上げる契機となる可能性をもつといえる．また，地域でのボランティア活動としては，スポーツ指導を行うだけでなく，スポーツ以外の指導や交流を行うといった多様な価値観に触れる機会が考えられる．さらには，大学や企業などとの連携から得られる体験的実践の積み重ねは，社会において必要とされる人間的態度や素養を育むのである．

3. プログラムの評価システム

真山・新川（2009）は，人材育成プログラムの評価の目的を 3 つのレベルで考えることができるとしている．第 1 次評価の目的は，プログラムの対象となる選手たちへのプログラム効果を計測することである．これは選手がどの程度知識を身につけることができたかの達成度と，社会生活に必要とされる態度などを身につけることができたかを明らかにするものである．第 2 次評価の目的は，人材育成プログラムの評価である．これは，人材育成が成されるようなプログラムとなっているのか，プログラムの内容が適切かどうかを評価するものである．第 3 次評価は，社会的にアピールを行い，説明責任を果たすための評価である．それは，教育機関やその意思決定にかかわる権限をもつものや，教育に資金を援助する支援者などに対して行われるものである．

第 1 次評価においては，選手個人による自己評価が中心となる．つまり，それは，スポーツでの達成，学業での達成，人間的な成長という 3 つの側面に沿って選手個人が具体的に設定した目標の達成度を自己評価することである．このような自己評価に加えて，他者評価の必要性も指摘されている（来田ほか，2011）．これは，選手の練習や日常場面における態度や行動の変化を PT メンバーによる観察によって評価することで実施できよう．その実現のためには，人材育成プログラムの開始段階で明確な目標を設定することに留意する（来田ほか，2011）ことが必要となる．

本プログラムが人材育成を目的としていることを考慮すれば，定期テストの結果や試合の結果といった絶対的な評価は大切であるものの，目標達成に向けた一連のプロセスをより重視する必要があるといえよう．

第 2 次評価は，今回のような新規に始められたプログラムの場合，その説明責任を果たし，プログラムの改善につなげるために必要となる（真山・新川，2009）．第 2 次評価手法は，PT メンバーによる自己評価，選手による評価となる．スポーツ活動への参加を通じたライフスキル獲得に関するこれまでの研究では，その多くが横断的に行われたものであるため，縦断的研究の必要性が指摘されている（島本ほか，2010）．加えて，来田ほか（2011）によると，人材プログラムの効果は，短期，中期，長期的に現れる場合があるため，評価のタイミングが重要な視点となるという．そこで，ここでは，ライフスキルの獲得には，長い時間がかかるとの主張（調枝，2001）をもとに，評価を 3 カ月ごとに設定することとする．

Ⅳ．まとめと展望

本論では，日常的なスポーツ活動を通して人材育成が成された事例から得た知見とライフスキル教育プログラムを基に，国際交流スポーツイベントに着目した人材育成プログラムとその運営方法を提示した．本プログラムの実施によって，日常的な運動部活動を通じての人材育成が可能となるため，より効果的な人材育成が可能になると考えられる．また，このプログラムは，学校と家庭の連携する新しい取り組みとなるだけでなく，地域における人を育てる力の再生にも役立つと考えられる．つまり，本プログラムの実施は，ひとつの運動部活動における活動にとどまらず，教育における課題の解決の一助になる可能性をもつのである．しかしながら，その検証が今後の課題となろう．今後は，本プログラムの説明責任を果たすために，PDCA というマネジメントサイクルを援用し，その効果について評価し，この評価をもとに本プログラムを改善し，より高い効果を生むプログラムの策定をおこなうことで，スポーツの人材育成機能の回復が期待されるのである．

注13) 暗黙知とは，人が知り得ていることでありながら言葉にできない知識である．一方で，形式知とは，言葉や文書で説明可能な知識である．

注14) 経営学者である野中郁次郎は，暗黙知と形式知の相互作用によって新たな知が創造されるという理論モデルを提唱している．

参考文献

上野耕平，運動部活動への参加による目標設定スキルの獲得と時間的展望の関係，体育学研究，51（1），49-60，2006

来田宣幸，松野光範，横山勝彦「ライフスキル教育」開発プロジェクトと評価システムの構築―硬式野球部の取り組みを事例として―，同志社スポーツ健康科学，3，28-46，2011

榊原大輔，教育現場の現状，横山勝彦ほか編，ライフスキル教育，昭和堂，83-100，2009

島本好平，石井源信，運動部活動におけるスポーツ経験とライフスキル核との因果関係の推定，スポーツ心理学研究，37（2），89-99，2010

調枝孝治，生存秩序としての体育・スポーツ心理学，体育の科学，51（1），21-24，2001

中澤篤史，学校運動部活動研究の動向・課題・展望：スポーツと教育の日本特殊的関係の探求に向けて，一橋大学スポーツ研究，30，31-42，2011

中村敏雄，中村敏雄著作集 4　部活・クラブ論，創文企画，2009

松行康夫，松行彬子，組織間学習論　知識創発のマネジメント，白桃書房，2002

松野光範，横山勝彦「ライフスキル教育」開発プロジェクトの必要性―スポーツ選手を視点に―，同志社スポーツ健康科学，1，1-8，2009

松野光範，来田宣幸，横山勝彦「ライフスキル教育」開発プロジェクトの実践と課題―硬式野球部の取り組みを事例として―，同志社スポーツ健康科学，2，61-72，2010

真山達志・新川達郎，ライフスキル教育の評価システム，横山勝彦ほか編，ライフスキル教育，昭和堂，145-152，2009

文部科学省，高等学校学習指導要領，8，2008

横山勝彦・辻淺夫，暗黙知を伝えるライフスキル教育，横山勝彦ほか編，ライフスキル教育，昭和堂，7-22，2009a

横山勝彦・辻淺夫，スポーツとライフスキル，横山勝彦ほか編，ライフスキル教育，昭和堂，38-50，2009b

横山勝彦・辻淺夫・松野光範，日本のライフスキル教育，横山勝彦ほか編，ライフスキル教育，昭和堂，71-79，2009

Miller, A., Beyond the four walls of the classroom, Wills, D. B. and Rappleye, J. eds., Reimagining Japanese education, Symposium Books, 171- 191,2011

Putnam, R. D., Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy, Princeton, N.J., Princeton University Press, 1993(河田潤一訳，哲学する民主主義―伝統と改革の市民的構造，NTT 出版，2001)

WHO 編（川畑徹朗ほか監訳）「WHO・ライフスキル教育プログラム」大修館書店，1997

資料　インタビュー結果の抜粋

選手 A （例年練習がない冬の練習は,）とってもきつかったけど，やってきてよかった．台湾の人は，大きくて強かった．日本でタックルの練習をしたのに，タックルを上手に出来なかったところが残念だった．パーティーで歓迎してもらっていることが嬉しかった．（台湾観光の際に）台湾の人に話しかけられた．知らない人にも話してくれるところが優しいなと思った．帰国して頑張ろうという気持ちになって，余計にタックルをしようと思った．美味しかった小籠包を帰国して食べたけどしわの数が違った．

選手 B　海外に行けることは楽しみにしていた．台湾に行く前の練習の時は，燃えていた．毎日 40 回筋トレしていた，台湾行きが近づいてきたら自分で 10 回プラスした．ラグビーの試合はすごく楽しくて，嬉しくて，心がウキウキしていた．合同練習で転んだ時に台湾の人が肩を貸してくれた．言葉は通じなかったけど優しかった．一緒に練習して絆を深めれたことがすごくうれしい．いつまでも友達だと思う．日本に戻ってきて力がでてきた．整理整頓ができるようになった．また外国に行ってみたい．震災のことを考えると元気がでないけど，台湾に招待された後はずっと元気がでる．

選手 C　海外に行くことは，初めてだったけど不安はなかった．台湾ことを家にあった本とかで調べた．冬の練習はきつかったけど，台湾に行って試合をしたかったから辞めたいとは思わなかった．台湾の人と練習したり試合した時に言葉は通じなかったけど，気持ちが分かるような気がした．試合は，相手チームがタックルとかが強かったので負けてしまったけど，2 トライしたので良かった．帰国後，勇気とか自信がついた．学級委員長を決めるときに自信をもって僕がやるといった．台湾行くまでは，そんなことはなかった．台湾にもう一度行きたい．試合をして，勝って帰ってきたい．

選手 D　台湾で言葉が通じるかどうか不安だった．冬の練習は，大変だったけどみんなが頑張っていたから頑張れた．試合は，相手が強くて大変だった．台湾の人も一生懸命プレーしていた．言葉は通じなかったけどパスがうまくつながった時に友達という感じがあってよかった．台湾は優しい人たちがいっぱいでいい国だなと思った．台湾に行く前にネットで調べて想像していたけど予想が難しかった．帰国後, 自分はもっと頑張れると思っ

た．他の国にも行ってみたいと思った．

選手E　台湾に行くと聞いた時ちょっと緊張した．行く前の練習がきつくて少しやめたいと思ったけど，台湾に行きたいと思ったから頑張った．台湾の空港に着いた時，息がしづらかった．試合ではタックルを決めれて良かった．台湾の人は，強くて大きかった．言葉は分からなかった．世界一速いエレベータに乗ったことが印象に残っている．台湾にも美味しいものがあることが初めて分かった．台湾にまた行きたいと思った．帰国後，前よりも練習を真剣にやるようになった．

選手F　台湾に行くと聞いた時，海外に行けるから頑張っていってみたいと思った．冬の練習は，きつかったけど台湾に行きたかったらから頑張った．練習は台湾の人たちと一緒にできて楽しかった．台北101に登ったこと，小籠包を食べたこと，道路が日本と逆（車が右側を走る）だったことを覚えている．台湾のお友達に日本語で挨拶した．たぶん通じた．台湾は楽しかったからもう一回行きたい．台湾に行く前に，学校で世界の国々を調べようという授業があったから台湾を調べた．最初は台湾がジャングルとかに埋もれていると思ったけど，岩手でいうと森岡に近かった．

選手G　台湾に行くことを聞いた時，ホテルとかに何があるかなと思った．冬の練習は，きつかったので，いやだなーと思った．でも，練習を一回休んだけど，台湾行きたかったから頑張った．行く前は，建物とか少ししかないと思っていたのに，台湾にはいっぱい建物があった．言葉は，分からなかった．試合は負けたけど，タックルはできたと思った．ご飯がおいしかった．もう一回台湾に行きたい．ラグビーは好き．タックルするのが楽しい．

コーチH　昨シーズンは，（震災の影響で）しっかりとラグビーを練習できる環境になかった．震災以前に使っていたグラウンドは，仮設住宅が建ち使えなくなった．ラグビーに限らずスポーツを出来る場が限られている上に，色々な競技と共用するので利用回数や時間が限られている．子ども達が発散する場がなくかわいそう．例年より数カ月遅れで（ラグビースクールの活動を）始めた．去シーズンは，1勝もしていないし1トライも取れていない．台湾に行くというきっかけをもらって，「やってやろう」という意識がでてきた．練習メニューが厳しくなった．子どもたちに「台湾に行きたいか？」と聞いたら，みんな行きたいということだった．選手の選考は，行きたいと希望して，きつい練習に休まず参加した選手を台湾に連れて行った．負けてしまったが試合が一番印象深い．（我々コーチだけでなく）子どもたちにも達成感はあったと思う．やろうとしたプレーができてトライも取れた．率直にいってすごく遠征が楽しかった．とにかく楽しかった．子どもたちも楽しそうであった．帰国後，子どもたちのラグビーへの興味をもっともっと伸ばしてあげたいと思うようになった．コーチとしてすごく良い経験をさせてもらった．コーチと子どもの位置が近くなった．きびしい練習を継続して，子どもたちは精神的に強くなったと思う．台湾との交流前に比べて勝負に対する意識が強くなった．雪の降り積もるなか，雪を踏みつぶし，一斗缶をだし火を焚きながら練習した．頑張ろうという気持ちが身体の中にしみついたと思う．台湾に行った子ども達が10年後の街（釜石）を引っ張る人材になる．台湾のチームが（釜石に）来るという話もあるが，（現状では）受け入れは厳しい．ラグビー交流は，子ども達同士の交流が限られていたので，次回は交流の機会が欲しい．この交流を継続するために，（我々は渡航費用を）積立していきたい．子ども達の保護者と話しあって継続していきたい．2019年のラグビーワールドカップの会場が釜石になるかもしれないから，その時に台湾の方に（釜石に）来てほしい．

コーチI　震災があったから，このような交流を企画してくれたと思う．感謝しかない．台湾に行く前に厳しい練習をして，海外でもプレーできて子どもたちは自信をもったと思う．帰国後，息子は急に学級委員長になった．今回の交流は，子ども達が変わるきっかけになった．子ども（息子）は，震災の際に人が流されるのをみている．今でも夢をみて，急に目を覚ますことがある．でもこのような企画をもらって目標をもたせる事ができたと思う．子どもたちは勇気づけられたと思う．台湾との交流が，きっかけとなった練習頻度の増加の成果がみえてきた．交流した，台湾の子どもたちがどのような気持ちだったのか知りたい．

コーチJ　台湾に行く前に，学校で外国について調べようという取り組みがあった．そこで子どもは中国と台湾について調べた．このように学校の活動においてもよいきっかけとなった．感謝申し上げます．自宅のパソコンを使って台湾について調べて渡航の準備をした．（ラグビー交流は，）海外に興味をもつきっかけになった．子どもが小学生のうちに海外に行かせてもらってありがたい．

コーチK　これまでチームとしてどこかに行ってまとまって何かをやるという機会がなかったので，（今回の交流は，）チームとしてまとまる良い機会になった．子ども達が自立する機会にもなった．帰国後の子どもは，台

湾や他の地域からの（震災復興のための）支援に応えるためにも頑張らないといけないという気になったようにみえる．私もただラグビーを教えるだけでなく，ラグビー通して色んな人がつながっていることを子どもたちに伝えていかないといけないという思いをもった．ファイブウッズの方が日本や岩手と台湾のつながりを教えてくれたので日本と岩手と台湾の関係に気がついた．ラグビーの練習や試合の際，日本と台湾の子どもたちは，言葉が通じないなりにグラウンドの中で結構話をしていた．ボールを通して交流していた．今後，この取り組みが大きな輪になってほしい

コーチ L　台湾に行くという目標があるっていうのが子どもが頑張れる理由．子どもは，餌があれば頑張れる．子どももコーチも目標があるとがんばれる．それも，はるかかなたでなく，目の前にあると頑張れる．

コーチ M　ラグビーだけでないと思うが，スポーツをやるにあたって自主的に自分が強くなりたい，勝ちたいという，想いをもつにはきっかけが大事だと改めて感じた．台湾に行く前の子どもたちは，練習に親に連れてこられ，練習をこなしているだけだった．震災というきっかけがあって，台湾というきっかけがあって，子どもたちが勝ちたいという気持ちに気づいてくれた．

コーチ N　台湾という餌をみて子どもたちの目の色が変わったのが分かった．子どもたちの練習に対する力の入り方が変わった．練習でかなり走り込んだが，「（台湾に）連れていかねーぞ」というと子ども達が走り始めた．親善試合が終わったらかなり感動した．自分がよっぽど力を入れていたんだなと思った．一生懸命指導し，やりきったという感じがした．そして，チーム全体がまとまっていた．

保護者 O　台湾に行くと聞いたときは，突然のことだったのでびっくりした．震災後の息子は，悲しそうな顔はしないけど震災を思いだしたりするようだった．例年だったらオフの期間も，台湾に行くにあたって失礼のないように練習には励んでいたようだ．子どもの成長を感じた．具体的には，家で腕立てと腹筋を自らしていた．自分で伸びたいと思うきっかけになったようだ．初めての海外滞在に対するとまどいは，あまり感じていないようだった．滞在を楽しみたいという思いが強かったと思う．行く前は台湾語の単語などを勉強していた．試合後にコーチの方の感動の涙もみれたので，コーチを身近に感じた．チームとしてまとまったと思う．帰国後，ラグビーへの取り組みが変わった．ラグビーを通してもっともっと友達を作りたいと思っているようだ．より積極的になった．子どもには宇宙飛行士になりたいという夢があるので，英語の勉強もしていかないとだめだという話をしている．台湾は，親日的で楽しかった．子どもは，言葉は通じないけどみなさんが応援してくれていることを肌で感じて勇気をもらったようだ．私自身も同じで，感謝の気持ちでいっぱい．

保護者 P　冬の期間の練習は，いつもよりも厳しい練習だったが楽しそうだった．台湾息が決まる前は，楽しく楽しくという練習だった．でも，台湾行きが決まってからは，走る練習が多かった．コーチたちの態度も厳しくなった．うちの子は，自分の限界を初めて超えることを楽しんでいたようだ．月曜日に練習だったが，月曜日はいかなくちゃと燃えていた．今まで厳しく身体を動かしていなかったので，厳しい練習が楽しいようだった．台湾滞在中の子どもはバイクが多い，建物がどうのだと景色をよくみていた．帰国後，テレビでもスーパーでも台湾という単語がでると釘づけ．行くとこんなに変わるのかと思う．子どもは，ラグビーに関してだけだが時間に対するルーズさが消えた．自分のものを自分で用意するようになった．飛行機に乗って外国にいくことを頭では多少分かっていたと思うが，身をもって台湾に行ったことで現実的に海外を考えることができるようになったようだ．小学生の時に行かせてみて良かった．

保護者 Q　台湾に行くと聞いた時，「台湾ってどこ？」というところから始まった．台湾についてお父さんがインターネットで調べて子供にみせていた．みんな台湾行きを楽しみにしていた．例年オフの期間にも練習をしていたので子どもたちは喜んでいた．練習から帰宅した時にすごくきついけど楽しいといっていた．以前は，仲良く仲良くという練習が多かった．台湾行きが決まって厳しい練習に変わった．子どもたちは，厳しいけどやればやるだけ上手くなるのがうれしいみたいだった．子どもたちは，全てのものに興味をもっていた．帰国後，テレビとかで台湾という名前を聞くとすごく反応している．近所のスーパーでバナナ買う時も台湾産に目が行く．台湾に行く前にやっていた練習を今も継続してやれているので，ラグビーが上手になってきている．台湾は，気候が良く食べ物もおいしかったので，すごくいいところだと思った．また連れていって欲しい．

付記

本研究は，同志社大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認（申請番号 1240）を得て実施された．